慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幼児の観察学習における観察前自己試行の効果
Sub Title	Effects of prior self trial on observational learning in children 幼児における観察学習：観察前および観察中に挿入された自己訓練の効果
Author	望月, 昭(Mochizuki, Akira) 阿曽, 夕香里(Aso, Yukari) 佐藤, 方哉(Sato, Masaya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1977
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.17 (1977.) ,p.85- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料 表紙のタイトル：幼児における観察学習： 観察前および観察中に挿入された自己訓練の効果
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000017-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幼児の観察学習における観察前自己試行の効果

Effects of Prior Self Trial on Observational Learning in Children

望　月　　昭
Akira Mochizuki

阿　曽　夕香理
Yukari Aso

佐　藤　方　哉
Masaya Sato

従来，観察学習における基本的変数の操作の多くは，一括したモデルの示範に続く観察者のテスト試行，あるいはモデルの示範と観察者の試行を交互に行うという二つの実験操作の流れの中で検討されてきた．しかし観察中あるいは観察前に，観察者が当該課題に対して何らかの経験を持っていることは，その後の観察の効果に大きな影響を与えるであろうことは日常場面からもうかがわれるところである．本実験は観察前あるいは観察中に挿入されたごくみじかい観察者自身の当該課題の遂行が，後の観察学習効果にどのような影響を及ぼすかを，この種の実験では標準的な同時弁別課題を用いて検討することを目的とするものである．

従来，観察者の側の実験変数の操作としては，言語化，リハーサルあるいは当該課題に関連した概念化の存否等が扱われてきた．そのように課題に内在する諸要因の一部を観察者が所有していることが観察学習成立の上で不可欠なものであることは，否定できぬ事実であろう．しかし，概念化といったような，モデリング自体とはいわば独立な課題構造の一部の要因のみを，被験者側の変数として操作することは，観察学習という状況を個体自身の認知一般の問題に集約してしまい社会的な場面における観察学習独自の特性を見失わせてしまう恐れがあると考え，我々はまず，上記したように，課題全体を予め被験児に経験させるという手段をとった．

実　　験

〔I〕方　法

（実験 1）

（1） 被験児(観察者)；東京都内4ヶ所の幼稚園* に通園する 3-4 歳児および 5-6 歳児

（2） モデル；心理学専攻の女子学生1名

（3） 装置；HAM 式同時継時兼用弁別学習実験装置（詳細は望月他，1977 を参照されたい.）

（4） 刺激材料；すべて赤色の丸と三角の充実図形で，常に大小刺激が対にして示される．種類は形，大きさ，大小の位置で計8対からなり，これと同じものが順序を異にして8対加わり計 16 枚が用意された．刺激対は，装置の左右に並ぶ刺激呈示窓（各々 14×14 cm）に示される．強化子は花形オハジキを使用した．

（5） 手続；①実験課題；（4）で記したような大小の対刺激に対しての二選択肢同時弁別である．被験者が大刺激に反応する（提示窓に示された刺激を透明アクリル板ごしに押す）ことを正反応として強化する．強化は大刺激に対する反応と同時に装置中央部の豆ランプが点灯し，中央下部の受け皿にオハジキが一個おちてくる．

②群構成；最初の16試行は，モデルおよび観察者によって行われ，その後，観察者のみで同課題を単独で遂行するテスト試行が続くという形をとるが，最初の16試行中のモデルの遂行および観察者自身の遂行の時間的関係によって2群（E_1，E_2 群）がもうけられ，他に統制群が2群（N群，C群）もうけられる（Fig. 1 参照）．E_1 群においては，16 試行中 1-4 試行を観察者（被験児）が自ら行い（SELF 試行），以後 5-16 試行をモデルが行い（MODEL 試行），観察者はそれを観察する．E_2 群に於てはモデルが 1-8 試行および 13-16 試行を行い観察者

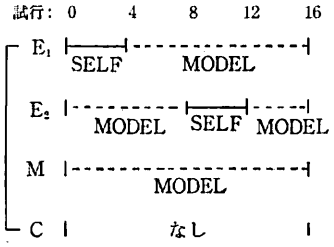

Fig. 1

示範時の観察（Mが遂行する）と SELF 試行（O が行う）のタイミング.

は 9-12 試行を行う．M群ではモデルが 1-16 試行全て行い，観察者は観察のみである．C群は，いっさいの観察および自己試行なしで，いきなり単独でテスト試行に入る．

以上の4群を基本的4群とし 3-4 歳児 5-6 歳児各々の被験児がわりあてられる（各群の人数は後述）．C群以外の各群のモデルは，正反応（大刺激の選択）および誤反応（小刺激の選択）を50%ずつ行う（Mi群と以下略す）．但し 3-4 歳児においては，Mi 群の他に，正反応のみを示範する Po 群をもうけた．したがって 3-4 歳児で，7群，5-6 歳児で4群，計 11 群がもうけられることになる．なお挿入された自己試行の間は，テスト試行と同じく正反応のみが強化される．

③テスト試行；各被験児は，②に述べた 16 試行のあと，単独で同じ課題を最高 32 試行おこなう．

④教示；各群の被験児は，観察試行ならびに，自らの試行の前に「よく見ているように」あるいは「なるべく間違えないように」等の教示を実験者からうけるが，各群，条件によってやや内容を異にする．

（実験 2）

実験2では，5-6歳のみを用い，最初の16試行中，E_1. E_2 各群の，モデルの示範部分を逆転条件にするMR群，観察者自身の遂行に対する強化の方法を逆転条件にするSR群をもうけた．その他の部分は実験1と同様で，テスト試行中は，一律に大刺激を正刺激とし小刺激を負刺激とする．またモデルの反応はすべて Mi 型である．（なお実験2で用いた被験者は実験1では参加しない．）

〔II〕 結 果

実験1・2でのテスト試行（32試行）における正反応率（百分率）の平均を各群ごとに Table 1, Table 2 にそれぞれ示した．カッコ内は，各群に使用した人数である．ただしテスト試行中8試行連続正反応したものは学習完成したものと見做して，試行を打ち切ったが，その後の試行は，すべて正反応であったものとして計算した．また Fig. 2, Fig. 3 に 3-4 歳児の Po 条件と 5-6 歳児のそれぞれについて，4試行を1ブロックとしてテスト試行における平均正反応率の推移を示した．横軸に示される ST は，観察前もしくは観察中に行なった観察者自身の遂行（自己試行）を示したものである．また Fig. 4 には，実験2における2種の逆転条件後のテスト試行の平均正反応率推移を同様に示し，比較のために，実験1の対応する群（E_1 群と E_2 群）の結果を併記した．

Table 1. Exp. 1 での各群の平均正反応率（%）および被験児数（カッコ内）

年齢	3-4		5-6
	Po	Mi	Mi
E_1	93.5 (9)	59.2 (11)	90.8 (11)
E_2	78.7 (9)	57.3 (10)	93.3 (11)
M	65.2 (9)	76.9 (10)	85.1 (11)
C		65.2 (10)	87.6 (10)

Table 2. Exp. 2（逆転 条件）での各群の平均正反応率(%) および被験児数(カッコ内)

	E_1	E_2
SR	60.1 (10)	80.2 (10)
MR	74.0 (10)	74.2 (10)
実 験 1	90.8 (11)	93.3 (11)

実験1の結果をみると 3-4 歳児の場合，Mi群すなわちモデルが 50% の正反応を示範する群では Table 1 にみられるごとく，E_1, E_2 条件ではあまり差がなく，統制群（C群）よりもかえって成績が悪くなっている．(3-4歳児

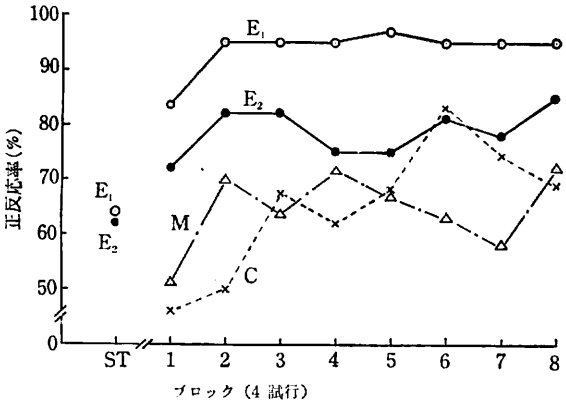

Fig. 2　3-4歳 Po 系列各群の正反応率推移（実験Ⅰ）

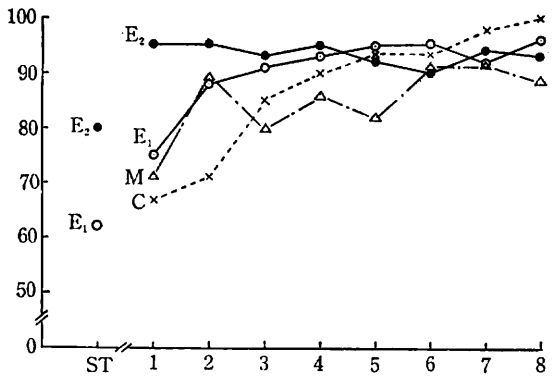

Fig. 3　5-6歳 Mi 系列各群の正反応率推移（実験Ⅰ）

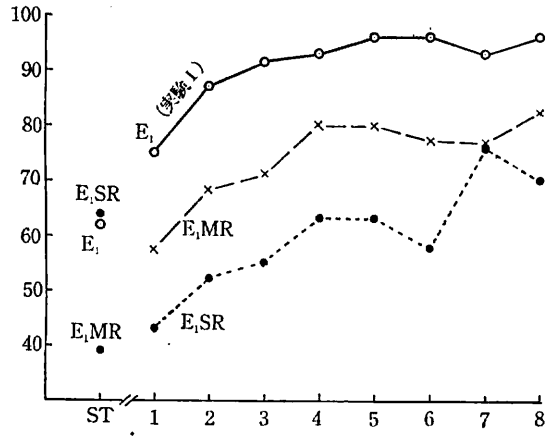

Fig. 4-1　E_1 での２種の逆転条件（実験Ⅱ）

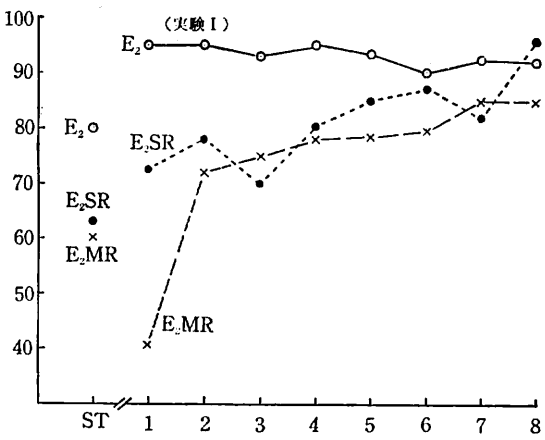

Fig. 4-2　E_2 での２種の逆転条件（実験Ⅱ）

Mi群については正反応推移のグラフは省略したが，テスト試行中各群の推移は，群別の差は明白には認められない.）3-4歳児 Po については，Table 1. および Fig. 2 にみられるごとく，E_1 群，E_2 群が，M 群，あるいは C 群よりも良い成績を示している．5-6歳児については，Fig. 3 にみられるごとく初頭ブロックにおいては E_2 群が他の群よりも好成績を示しているが，これは ＳＴ 試行ですでに 80%という好成績をみせていることから，テスト試行に入る前に，すでにかなりの学習が成されていると考えられ，このことを考慮するとテスト試行中の各条件の差は 5-6 歳児においては顕著ではないというべきかも知れない．

Po の 3-4歳児においては，E_1，E_2 両群，特に E_1 群がテスト試行で好成績を示したが，これは，観察前，あるいは観察中に，自らが，当該課題にさらされることが，観察学習効果に影響することを示している．もちろん，ＳＴ試行中の自らに与えられた強化，もしくは消去が，後のテスト試行と連続した形で，加算的に成績を向上させているという可能性もあるが，M群における第２ブロック以降の成績と，E_1，E_2 両群の第１ブロック以降のものを，１ブロックずらした形で比較してもやはり E_1，E_2 群は，M群よりも好成績であることは Fig. 2 からもあきらかであり，E_1，E_2 群では単に他の群のテスト試行を１ブロックだけ早く始めたという効果だけではなく，観察試行との時間的関係によって好成績をおげていると考えることができよう．3-4歳 Mi 群については，Table 1 などから E_1，E_2 群では C 群よりも，かえって成績が悪いが，これは観察中，比較的短期間の間に複雑な示範

の様式がモデルになされ，自己試行と，うまく結びつかなかった等の解釈が成りたつかも知れない．

実験2の結果に目を向けると，この実験は最初の16試行中のモデルの示範の効果，ならびに観察者自らの遂行の効果を，各種逆転条件により間接的に検討することが目的であったが，Fig. 4-1, Fig. 4-2 にみられるごとくどの逆転条件の下でも実験1での結果よりも成績はおちるが，モデルの強化が逆転している場合と，4試行自らの遂行に於て強化が逆転している場合とでは，その効果は，ST 試行の挿入の時期 (E_1 と E_2) によって異っている．すなわち冒頭の4試行が観察者自身の遂行である場合 (E_1) には，観察者自身に対して逆転の強化方法をとった群 (E_1SR) の方が，その後の12試行でモデルは小刺激に対する反応に対して強化をうける群 (E_1MR) よりも成績が悪い，一方 ＳＴ 試行がモデルの試行の間に挿入される場合 (E_2) では，テスト試行第1ブロックに於いて，モデルが逆転していた群 (E_2MR) が，観察者自身が逆転条件であった群 (E_2SR) よりも悪い成績を示している．

以上，本実験の主要な結果について述べた．われわれは，これらを統一的に理解することのできるいくつかの解釈をもっているが，いずれも，今後の実証的裏づけを必要とするものなので，本稿では，それらには立ち入らず資料として結果を報告するにとどめたい．

* この実験の実施にあたって田園調布幼稚園，鳥森幼稚園，枝光会幼稚園，鈴蘭幼稚園のみなさんに御協力を得たことを感謝する．

引　用　文　献

望月　昭・久枝恵理子・佐藤方哉　5-6 才児における観察学習，慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要，1977, 17, 37-43